



〒892-0841 鹿兒島市照国町13-42 カトリック鹿兒島司教区 電話099(226)5100 振込口座 02030-2-8359 編集発行 教区広報部 1部60円年間干共1100円



霊的活力と一体感を体験

三教区司祭合同黙想会



三教区(大分、鹿兒島、那覇)が合同で実施している教区司祭の「年の黙想会」が、六月五日(月)から八日(木)まで教区本部とザビエル教会を会場に行われた。参加者は各教区の現役司教、引退司教、終身助祭、助祭を含む四十三人。説教師は高見三明長崎大司教だった。

プログラムは午前九時から午後五時まで、祈りと講話とミサを中心としたもので、参加した司祭たちは日頃の任務からしばし解放され、司祭職の原点を見つめなおす説教師の話に聞き入った。

六回の講話のなかで高見大司教は、キリストの祭司職、預言職、牧職のあり方を神学的に明確にしなから、その役割にあずかりそれらを遂行する立場の司教・司祭の使命と生き方を

必要」とこれまで多くの宣教師が派遣されたにもかかわらず変化しなかった日本の教会に反省を促す。そして「教会の変革には四百年を要する。だから今から動き出すことが大切」と言い切る。教区での本格的始動に期待が寄せられている。

志布志教会主任 松田清四朗神父

この四月、志布志教会に着任したのは松田清四朗神父(五十八歳)。奄美大島は大熊の出身。

「体験というより感動して欲しい」とは、自らが取り組んでいる新しい人間関係構築のためのプログラムについて。「信仰もリーダーシップも養成されるもの」と訴えている。

「規則を変えても教会は変わらない。必要なのは司祭同士、信者同士の人間関係を新たにすること」「究極の指導性を持ちながら支配しないリーダーが



具体的に説いた。この沖縄、大分、鹿兒島の三教区司祭のための合

次年度繰越金過去二年間で三百四十万円減 教区司祭地区財務委員会

定例の教区司祭地区財務委員会が六月四日(日)午後、教区本部で開かれた。参加者は教区司祭地区に属する教区顧問三人と九教会の各信徒財務委員の十二人。

郡山司教になって初めての会合となった会議は、自己紹介、財務管理規定の朗読の後、二〇〇五年度決算と二〇〇六年度予算の審議に入った。決算は承認されたが、

予算書は記載科目箇所変更の説明不足のため後日、修正箇所の詳細な説明文書添付を条件に承認された。審議の中で、信徒財務委員から収入の内訳で献金収入の約三倍の額が、司祭寄付金でまかなわれている事実や、教会維持

バーベキューで交流



同黙想会は二十年以上にわたって続けられている。三教区が持ち回りで主催する

ことになっているが、鹿兒島教区が担当の黙想会で、会場が鹿兒島教区内だったのは今回が初めてのこと。ザビエル教会と教区本部棟が完備されたこと、周辺に簡易なホテルがあることが幸いした。

黙想会のはじめと締めくくりに食事会では女性信徒の会や、連合壮年会のメンバーが献身的に奉仕した。他教区からの参加者は心温まる接待に大変満足した様子だった。

松永久次郎司教

十五年間福岡教区を導いてきたヨセフ松永久次郎司教が六月二日(金)午前一時ごろ、同教区司教館で亡くなった。七十六歳だった。同司教の葬儀ミサは五日(月)福岡カテドラル大名町教会で執り行われた。

修道会便り

▼マリア布教修道女会 マリア布教修道女会(ノニ・ミルカ管区長)のセラフィナ中村邦子修道女(大根占教会出身)は、七月二日(日)泉南修道院で初誓願を宣立することになった。

ルカ福音書

今年の夏期集中講座

夏恒例の教区主催「夏期集中講座」が八月二十一日(月)から二十五日(金)まで、鹿兒島カテドラル一階ホールで開か

七月二十三日(日) 十四時

テイエン師司祭叙階式

叙階式 鹿兒島カテドラル・ザビエル記念聖堂 司式 郡山健次郎鹿兒島司教

※祝賀会はカテドラル一階ホールで行います。当日、駐車はできません。ご了承下さい。

司祭の消息

▼M・ヴィンマン神父

鹿兒島教区で長年、活躍したレデンブートル会のヴィンマン神父(現長崎教区)の写真はこの春、直腸ガンの手術を受け現在も治療中である。

五月末、神父を見舞った郡山司教に「回復したらまた鹿兒島で働きたい」旨を告げ、現場復帰への決意を述べたという。教区民も神父の一日も早い回復のために祈って欲しい。

YET!

親が子を失う、人が身近な存在を奪い去られる、そんな事件があらゆるメディアを通して耳に入ってくる。呆然とする親や関係者の姿。言葉に言い表せない悲しみ、「はらわたが引きちぎられるような」とはまさにこのような状態なのか▼そんな親や被害者たちの多くは加害者に対して「絶対に許さない」「極刑を」と訴え、またメディアもそれを後押しするかのようである。悲しみがそのことで

勝利(正義)へと変えられるのならばよいのに▼ならばと、十字架上で死を迎えたイエズスを見つめる聖母の悲しみとその勝利について考えてみた▼聖母はどのように民衆への思いをためていたのだろうか。もちろん、現場に居合わせることでできなかった者にはそれを伝える術はない。ただ連綿と続いてきた教会の姿から、聖母の心を探るのみ。それは偉大な者の伝える勝利「それでも私はゆるそう」という究極のチャレンジ精神ではなかったらうか。

ザビエル家の子孫来鹿 冒険家マリチャラルさんが水上バイクで

ザビエルから十五代目にあたるスペインの冒険家アルバロ・デ・マリチャラルさんが、六月十三日にザ

ビエル教会を訪れた。マリチャラルさんは「ザビエルの足跡をたどりたい」とザビエルの誕生日の四月七日



ザビエル公園で

に、ザビエルが亡くなった上川島を水上バイクで出発し、台湾、沖縄、徳之島、奄美大島を経由し、六月十一日に鹿児島市に着した。ムイベルガ神父の通訳で市内のザビエルゆかりの地を巡っ

薩摩の殉教者

レオ税所七右衛門②

要理学習から洗礼へ

妻と二人の子どもがいたという七右衛門についてホセ・デ・サン・ハシントは「背が高くやせ形、色はやや黒い。穏やかな性格で、口数が少なく、慎み深い」との記述を残している。

七右衛門がキリスト教に興味を持つようになったのは友人の信者ジョアン小兵衛の影響。彼からキリストについての話を聞いた七右衛門は、その教えに興味を持ち、もっと教えを知りたいと願う。そして七右衛門の教理勉強は、京泊の教会と教会から四里ほど離れていた彼の自宅で行われた。そして七月二十二日、聖マリア・マグダレナの祝日に洗礼を受けることになった。

+KABAYAN SEKSIYON+

"Ang Pagkilala sa Diyos ayon sa Simbahan"
Ang pangatlong bahagi na tatalakayin natin ay "Ang Pagkilala sa Dios ayon sa Simbahan". "Ang ating banal na ina, ang Simbahan, ay pinanghahawakan at nagtuturo na ang Dios, ang unang pinagmulan at huli sa lahat ng bagay, ay maaring makilala na may kasiguruban ayon sa mundong nilikha sa pamamagitan ng natural na liwanag ng pangatuwiran pantaong". Kung wala ang kakayahang ito, ang tao ay hindi maaring tumanggap ng kapahayagan ng Dios. Subalit ang tao ay mayroon kakayahan nito dahil siya ay nilikha "na kawangis ng Dios".

Sa kalagayan ng kasaysayan na kung saan matatagpuan ng tao ang kanyang sarili, ay nakakaranas ng maraming kahirapan nang pagkilala sa Dios na kung sa pamamagitan lang ng liwanag ng pangatuwiran. Kahit na mayroon pantaong katuwiran ang tao, na may kakayahan na makilala ang nag-iisang Dios, na siyang gumagabay at may kapangrihan sa paggalaw ng mundo at nagsulat sa ating mga puso ng batas na natural, ay mayroon pa rin mga bagay na nakakahadlang sa kaisipan ng tao na makilala ang Dios na may likha ng lahat ng bagay dito sa mundo. Para sa katotohanan na ito ng relasyon ng Dios at tao ay natatagpuan ng mga bagay na nakikita sa kaayusan, at kung ito ay naisalin sa gawang-pangtao at mabahagian nito, sila ay tinatawag para sa pagsuko at pagtakwil ng sarili sa Maylikha. Subalit ang pangtaong kaisipan sa kalagayan nito ay nahahadlang na makita ang katotohanan, hindi lang ng mga sentido at imahinasyon, kundi rin ng mga panlasang hindi maayos na nagiging sanhi ng orihinal na kasalanan. Kung minsan ang tao ay nagkakaroon ng pagdududa sa mga bagay na kanilang nararanasan at nakikita. Kaya ang tao ay kailangang palaging maliwanagan ng kapayahagan ng Dios, hindi lang iyong mga bagay na kaya niyang maunawaan kundi mga bagay rin na banal at mga katotohanang moral na hindi kayang abutin ng pantaong pangatuwiran, para makilala ng presenteng kalagayan ng lahi ng tao, ang katotohanan ng bagay na ito na walang bahid ng kamalian at kasingungalingang. Nakakasiguro tayo na sa turo ng Inang Simbahan ay mas lalo natin makikilala ang Dios na Buhay. Kaya mga Kababayan ko magtiwala tayo sa turo ng Simbahan.

司教執務 室便り

某日某曜日。御聖体をカバンにふらりと部屋を出た。さて、昨年

十数年前の記憶を辿りながら再挑戦。偶然出会ったK婦人の車に新任の主任司祭にも同行を願ってイザ。昨年出来たという二階建てのきれいな施設はカーペットに素足。職員も親切

気ままなある日 のお散歩司牧

会ったままのあの人はどうしていることやら。受付で五階と案内された先での返事は「退院されました」。教区事務所との通信が始まった。電話・住所判明。ピックアップさせよう、とイキナリ訪問を決定。バスを乗り継ぎ、勇んではみたものの、自宅を特定出来ず、事務所からの遠隔指示で、なんとか目的地ゲット。だが、本人は、近くの老健施設に入所とのこと。再度検索を依頼。

だった。ともあれ、事務所と通信を始めてから約二時間。ついに、涙の対面。そして、まるで炎暑のもと冷たい水をごくごく飲むかのように、時々声を詰まらせながら捧げるロザリオ一

たマリチャラルさんに、小川神父から記念にザビエルのブロンズ像が贈られた。また、十三日夜にはザビエル教会でザビエル顕彰会主催の歓迎セレモニーが行われた。その後、長崎、山口などを巡り東京まで行く予定で鹿児島を後にした。

連。お祈りの後で、主任司祭を紹介。半身麻痺が痛ましかつたが、今も歌を詠んでおられると聞いて安心。長い間、人知れずひっそりと療養していた羊がまた一人群れに戻った。ヤッター。みんなハイタッチ。これも、事務所スタッフとの連係プレーの成果。まさに、一件落着。小教区を越えた自由気ままな司牧を満喫した半日だった。



ヨゼフ タム神学生の便り

私はヨゼフ・グエン・ホン・タムです。ヴェトナム出身で現在、神学課4年生です。フィリピンのマキタ市にある聖カルロス大神学校の大学院で学んでいます。私の趣味はスポーツです。ピンポンやテニスをします。サッカーの観戦も好きです。

私はフィリピン人のように気さくな人間です。今学期(2006年9月~2007年5月)はここでの神学校生活の最後の年になります。2001年の夏に私は気さくで歓待の精神にあふれていて、しかも暖かくて美しいこの神学校に来ました。こちらの気候は私の国と似通っています。冬でも暑いですし夏はもっと暑いです。食べ物は豪華でしかも美味しいです。

この国に来たときの最初の印象はいつも忙しそうに働いている人々を見て、ヴェトナムとは随分違うぞ!ということでした。しかし、フィリピン人の神学生が自分に親切にしてくれたり、英語の発音を熱心に直してくれたり、授業の復習の仕方を教えてくれたり、自分の言いたいことが相手に十分に伝わらなかったり、逆に相手の意図することが理解できなかつたりしてどうしていいかわらなくなった時、心を打ち明けて付き合ってくれ

ました。そんな経験からフィリピン人は仕事人間で他人に無関心な人たちという印象は消えました。少しずつですが、彼らは私にとって、最初は家庭教師、それから友人、そして今はどのようにしてキリストの善良で愛される弟子になるかを目指す人生の同じ道を歩む兄弟と思えるようになりました。

現在、私は30歳です。どうすれば「兄弟的愛」を生きる人生を送ることができるかを学びました。その意味で彼らは私の両親でもあります。故郷を出てから一度も帰っていないので、その間、特別な方法でこの国が私を育ててくれたと心から言いたいのです。私はヴェトナム人とフィリピン人を含めて養育者と友人たちを自分の家族だと思っています。

司祭養成課程の最後のこの一年を過ごすに当たり、この数年間、この地に神が私を送って下さったこと、また何時も私とともにいて下さったことに心から感謝いたします。私はお世話になった人を忘れません。そして、主イエス・キリストの生き方に従う良い司祭になれるように養成と鍛錬に私の大事な時間を費やすことをお約束いたします。

※タム神学生は、アン神父、ティエン助祭と共に鹿兒島に派遣される予定のベトナム人神学生。

思考

民族間の対立に伴い紛争が起これば、決まっています。宗教や文化の違いが取りざたされ、それが紛争の原因として、誰もが納得する「解」とされず。

でも、考えて欲しいのです。一体、そこ(紛争地域)で何が起きているのか。単純に、異質な価値観を持つ人々が対立し合うのは仕方ないことだと決めつけてしまわないで欲しいのです。

対話を通して

果たして、宗教や文化が違ふということ、常に対立関係が生じ、最悪の場合、互いに血を流し合う紛争にしか向かわないのでしょうか。私たちは、異なる価値観を持つ人々や、宗教や文化の違う人々を真の意味で理解することはできないのでしょうか。

そこで起きている事が、人間にとって、普遍的な問題(人権が抑圧されたり、人間の尊厳が踏みつけられる)であったり、差別や搾取があったり、人間としての品位を保つことができない程に、衣食住に事欠く状況)であれば、誰もが行動を起こし、反抗を示すだろうなあと理解できれば、互いに対話を通して和解し、平和のうちに共存してゆける道を切り拓いてゆく努力をすることが可能だと信じます。私たちは、人間として、生命の価値を尊ぶからこそ、独善を乗り越えて対話ができます。

司教講話で「神の本気さ」学ぶ

歴史あるカトリック北薩大会

北薩地区教会の交流と研修を目的にした「カトリック北薩大会」が、五月二十八日(日)入来小教区(アッシュャー神父主任司祭)にある知的障害者更生施設「薩来園」であった。各地から集まった百五十人の信者たちは郡山司教の講話で「神の本気さ」について学習し、また心を通わせ合い、ミサと聖体行列で締めくくるといふ有意義な一日を過ごした。



ミサの終わりに聖体行列・礼拝が行われた

レズンブートル会が担当している北薩地区教会の絆は極めて強い。この「カトリック北薩大会」も「信徒交流会」「信徒大会」など名前を変えながら、もう三十年以上の長きにわたって毎年続けられている。今年の大会のテーマは郡山司教が

紋章に刻んだモットー「それでも 喜び・希望・感謝」。講話と交流、ミサと聖体行列で北薩地区の五小教区(出水、阿久根、川内、大口、入来)の信者たちの絆は一層強まっていった。午前の講話で講師を務めた郡山司教は司教自身の信仰のキーワードと言えるものを紹介。特に「神の本気さ」については放蕩息子例え話をもとに分かりやすく、熱く語った。司教は

「本気で人間のことを思う神は、人間がハッピーでなければハッピーでない。人間が完成されるまで、人間がおん父のもとに帰るその日までおん父は祈り続けられる」と語り、「あなたが駄目な人間というのには神は分かっている。

それでも神は本気にあなたのことを考える。だから回心してその招きにこたえて欲しい」と語った。交流を一層楽しくしてくれられた昼食後は、ミサがさげられ、その後の聖体行列で有意義な一日が締めくくられた。

講師はもちろん…あの人

奄美カトリック女性連盟総会

奄美カトリック女性連盟の第二十八回総会が六月十一日(日)、各小教区から二百四十人余りの会員が出席して大熊教会で行われた。総会テーマは「今、私にできること―家庭、教会、地域における役割と使命」。午前十時から始められ

門田 明氏の 鹿児島とキリスト教③ アンジローか? ヤジローか?



長谷川画伯が描いたヤジロー

先月号では、ザビエルを日本に案内したヤジローについて語り、彼を取り上げた二冊の本、岸野久「ザビエルの同伴者アンジロー」(吉川弘文館)と新村洋「天文十八年」(高城書房)を紹介した。ところで、この二冊の書物で、同一人物を、前者はアンジローと呼び、後者はヤジローと呼んでいる。何故こんなことが起こるのか、奇妙に思う人もあるだろう。そこで、一応私なりの説明をしておきたい。

まずザビエルは、彼の名を「Angero」と表記している。他に「anjuro」「anjuroo」などと書いた宣教

師もあり、アンジロー、またはアンジロウと書かれるようになった。しかし、アンジローは、いかにも耳慣れない日本名である。歴史の本や小説などでも見たことがない。そもそも「アン」という言葉は、「暗」と同音であり、暗愚、暗黒などと連想させ、子どもに名付けるとき、このような不吉な印象を与える語をわざわざ用いる親はいないだろう。一方ヤジローは弥次郎と漢字を当て、弥一郎、弥三郎などと並んで、広く普通に使用されている名前である。

では、何故ヤジローがアンジローになるのだろうか。実はここで少し音声学的な分析が必要だと思う。人間は、子供の頃から毎日使っている母国語の音にない音を、正確に聞き分けたり再現したりするのが、非常に難しいことがある。ザビエルは、山口(ヤマグチ)を「アマングチ」と読んでいた。「アマングチ」の「ア」を「ヤ」に変え、「ン」を取り除けば正確な「ヤマグチ」の音になる。同じことを「アンジロー」に当てはめ「ア」を「ヤ」に変え、「ン」を取り除くと「ヤジロー」になる。「グ」の前の「ン」と、「ジ」の前の「ン」は若干違いがあるが、いずれも排除できるようである。

ザビエル時代の日本語通詞ロドリゲス・ツヅも「Yajiro」が正しいと明言しており、私自身、パウロ・サンタ・フェの日本名としては、ヤジローを使うのがよいと思っている。



た総会ではまず重信会長が、続いて大野和夫顧問司祭が挨拶した。大野神父は「糸永司教から奄美は司教を三人も出して素晴らしい美の方言やユーモアを交えて話した。会員たちは、飾らない親近感の持てる司教の人柄と聞く者にストレートに響く講話に多くの希望と勇気をもたらしたようだった。

午後からはこの春、奄美に赴任してきた司祭の紹介があり、それぞれが奄美に対する感想を述べたほか、司教を囲んで基調講話

短 信

ザビエル教会聖信式

聖霊降臨の主日の六月四日(日)、ザビエル教会では聖信式が行われ、二十一人が恵みに浴した。

▼スピリチュアル・コンサート

「聖フランシスコ・ザビエルと福者ファアブルの生誕五百年」と「聖イグナチオの没後四百五十年」を記念するエリザベト音楽大学

7月

会と催し

- 2日(日) 年間第十三主日
- 3日(月) 聖トマ使徒
- 9日(日) 年間第十四主日
- 16日(日) 年間第十五主日
- 18日(火) 司祭評議会・教区本部・10時
- 21日(金) ユゼビウス神父命日(一九七九年)
- 23日(日) 年間第十六主日
- 24日(月) テイエノ師司祭叙階式・カテドラル・14時
- 25日(火) カトリック幼稚園研修会・25日まで
- 28日(金) 聖ヤコブ使徒
- 29日(土) 松田清四郎神父叙階記念日(一九七四年)
- 30日(日) アジアユースデー・8月5日まで
- 31日(月) 年間第十七主日
- ハヌス神父叙階記念日(一九五五年)

の感想や質問など和やかな雰囲気に分ち合いがあった。その後二時からミサがさげられ、午後三時に閉会した。

同会では総会時には「いのちの献金」と「円アリオ基金」への協力も訴えているが、その理解も年ごとに高まっている。(報告/久保和子)

カトリック教師の会 講演会・黙想会

日時 7月29日(土)16時~30日(日)11時
場所 マリア山荘 講師 郡山司教
テーマ 「それでも喜び・希望・感謝―カトリック教育の目指すもの」
参加費 3,000円(宿泊代・食事代含む)
問合せ 岩崎正幸(ラ・サール高校TEL268-3121)

ザビエル生誕500年記念に行く

期間 9月18日~27日
内容 ザビエルが東洋に向けて船出したりスポン、初めて日本から留学したペルナルド縁の地コインブラ、天正少年使節が歩いた道、ファチマ、聖テレジアのアピラ、マドリッド、トレドなど

ポルトガル・スペイン巡礼10日間

募集人員 20人(催行最小人員15人)
同行司祭 ムイベルガ神父(谷山教会)
主催 他宗教対話の会
旅行手配 グローバルユースビューロー
TEL099(223)2175 担当 上野

